

組 織 再 改 革 試 論

小 野 龍 弥

これは試論である。今後クラブの現役、OB、顧問、部長、学内これらの諸関係間において個々に或いは協同で検討してゆくべき性質のものである。クラブは年々人新たましながら発展してゆく。先輩から後輩へバトンタッチされるもの、それは精神であり技術であり組織であり即ち伝統である。

今日のクラブは私の現役時代と較べたとき、その隆盛眼を見はるものがある。潜水、洞窟、ボート、僻地、山岳と吾々の探検の概念にある分野のおおよそをレポートリーにもち、その個々は激しく深く広く活動している。

文明の波があらゆる国あらゆる人間をおおいつくすかに見えるとき、探検の目指すものを求めることは大抵ではない。然し乍ら地球上に限られた地域には未だ開明せられざる分野が残っている。地球上の未知が全く開明されつくす時代が来ないことも確かである。それ故にこそなお一層吾々は深く感動するのだ。地球上に探検がなくなるその時代には宇宙への探検が始まっているだろう。人間の未知への本能は宇宙の広大さをも征服しつつすることは明らかである。

吾々「関大探検」はそんな時代に生れ、広いレポートリーとたくましい伝統をもって今日を活躍している。世界の増舞台に「関大探検」の真価を問う日も遠いことではないと確信する。

ふりかえてみよう。クラブの創設期は単一の活動分野をもって日本の全離島をめぐるた。

かく云う私も最南端の与論島まで出かけた。然しそこに発見するものは何もなかった。文明化された島と人であった。私はもっと強烈な探検をこそ望んでいた。吾々に欠けていたものは何であったか、その疑問を解決してくれるものが技術研究会の誕生であった。より専門化された技術と知識こそ本格的な探検の条件であることは理明である。技研は山岳を主体に洞窟へも入った、ドラムカンの帆船での航海もまた論議された、でもこんなに広く技術と知識を修得することは、個人の能力としては不可能に近い。個性にあった場に探検を求めることこそ、より効果的な探検を生むに違いないであろう。

技研の誕生と前後して「踏査」誌上に「組織改革論」なる小文を発表した私の動機はこのように個性を生かした探検にあった。幸い賛同を得た小文はクラブを動かし、ここに初めて別個の合宿、別個の活動が正式にクラブの方針として打出されて今日に至り、以来潜水が生れ、ボートが生れて互いが、どれだけ未知への興味をもち、どれだけ未知の開明をなすか、情熱と意志のよきライバル同志として、「関大探検」は世界へ羽ばたかんとしているのである。

最近の主な活動をひろってみても、ペルー・アンデスへの山岳部と合同の遠征隊派遣、日本一深い堅穴の発見と開明、フィリッピン近海での潜水調査、台湾での河川調査と、その活動は海外へと進展の途上にある。

更に部内にあつては（現在では山岳にのみ活動

している。) 技研をとり上げてみるならば、技研の目標とはアンデス・ヒマラヤ等の山岳地域における未踏の開明にあり、それをなさんとする者はOBであり、現役時代は全て技術と精神の練磨に当てられ、専門的な山岳探検家に養成されて来たるべき探検にそなえるのである。このように年輪を入れて探検にとりくむことの効用はもはや論ずるに及ばないであろう。技研のみならず、未だ若い他のパートにしても、より充実したより社会的な探検をなさんとするれば、このような技研的システムをとる以外にはないことも明らかである。吾々が生涯を「関大探検」に生かしきる熱意をもってこそ、社会の進歩に一步でも貢献できるものと信ずる。

さて吾々が日々の努力の積み重ねによってその活動がより社会的に意義をもつようになれば、言葉をかえて云うならば、そのような社会的に意義のある探検をなさんとするならば、吾々はより合理的な組織とより充実した予算が必要となることは明らかである。

ここで私は飛躍して結論を述べよう、試論の言わんとするところは来たるべき日におけるクラブの解散と再組織である。そして再組織された暁の

「関大探検」は「関大探検連盟」という名称の下に、潜水部、洞窟部といったクラブを包容しているのである。更には探検連盟は学内的には体育会文化会等の組織と同等の地位にあるかも知れないということである。

いづれ近い将来、吾々のクラブはその性質も活動の場も違う各パートの力が、膨張しつつげた結果、文化会所属の一クラブ内には、互いを収容しきれないようになることは、組織の発展の上で、当然来たるべき現象である。そんなとき、爆発して無方向に飛び散ることは「関大探検」を旗印に努力してきた日々をむなしくすることになる。それ故、吾々は来たるべき日にそのような結果を招かないように将来を考えながら、今日を生きてゆくべきではなからうか。

連盟という形にもってゆくことには色々な批判もあるだろうし、そこに残れない性質のパートもあるかも知れない。そんな諸条件を含んで「関大探検」がより社会的貢献をなさんとする道を、今後互いに検討し議論し合ってゆくならば、そこにいい成果を招くことは明らかであるし、私の試論の価値もあったといえるのである。

御検討御批判を乞う次第である 542.3.38

「第5号刊行を間近にして」

時は限りなく激しく流れて行く。私が試論第4部を仕上げてより、クラブも私も時を経た、試論には現在の実情にそぐわない点多々あるが、あえてそのままに発表した。何故なら第4部仕上げの時点では、これが真実であったし、充分皆様に私の意図するところはわかっていただけたと思う。

私事になるが近々私は結婚する、だが探検に対する情熱の退化ではないことは今後の活動で見ただけだと思う。激しく移りゆく時の流れの中にあって自分の道を拓いて行くことの困難さもまた探検に通ずる道であろう。 1967・11・18

おの・たつや(O.B)